



## イラク・クルディスタンの考古学--課題と可能性--

著者	大津 忠彦, 下釜 和也
雑誌名	筑紫女学園大学・短期大学部人間文化研究所年報
号	25
ページ	1-18
発行年	2014-08-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1219/00000445/">http://id.nii.ac.jp/1219/00000445/</a>

# イラク・クルディスタンの考古学 —課題と可能性—

大津 忠彦・下釜 和也

## The Archaeology of Iraqi Kurdistan: its Issues and Perspectives

Tadahiko OHTSU · Kazuya SHIMOGAMA

### はじめに

2010年末のいわゆる「アラブの春」以降、中近東情勢は一段と混迷度を増している。さかのぼれば「湾岸戦争」（1990年8月2日～1991年2月28日）、「イラク戦争」（2003年3月20日～2011年12月14日）以降急激に嵩を増した様々な矛盾が、あらためて一気に顕在化した様相である。「シリア騒乱」の現状からみれば、それはもはや旧来型の「民族」・「宗教」対立を軸とするだけの問題ではなさそうでもある。

中近東の政情不安・危機・変革は、ここをフィールドとする考古学研究の進展をしばしば足止め状態にしてきた。「イラン革命」（1977～1979年）が、いわゆる西側研究者による1世紀以上もの遺跡調査を実質継続不可とし、あるいは「湾岸戦争」、「イラク戦争」がメソポタミア考古学におけるフィールドワークを停滞させて久しい。ある意味でそれらの代替地となっていた「シリア」、「エジプト」もまた、現況下では考古学研究どころではない観がある。

日本西アジア考古学会（Japanese Society for West Asian Archaeology）が「特集 西アジア考古学この10年」をその学会誌上に公表した折、担当者の小口は「イラク戦争」後のイラク国内での治安の悪化は、「回復する見込みがなく、イラクで発掘調査を行っていた外国調査隊が発掘の再開と継続を断念せざるを得ない状態にまでなっている」、「メソポタミア考古学は近年ほとんど研究面での進捗をみていないのが現状」として、外国の研究者（＝欧米研究者、引用者註）による「湾岸戦争」以前に行われた発掘調査の成果を基盤にした研究」、および「イラクを訪問した英国の考古学者」からの伝聞情報としての「イラク人自身による調査」を報告した（小口2008）。

あれからわずか5年ほど経過した今日、あらためて当該地に注視すると新たな動きが確かに見出される。というより、これまで混乱・政情不安の近寄り難い「危険地帯」とばかり喧伝されてきた観のあるところも、内実は世評と異なるらしいとの情報に接するようになってきた。その一例がイラク北部クルディスタンにおける動向である。

そのような中、著者の一人（下釜）はわずかな期間であったが現地を訪問し、若干の考古遺跡を実見する機会を得た<sup>(註1)</sup>。この知見を基にしながら、本稿ではイラク北部クルディスタン自治区内<sup>(註2)</sup>においてこれまでに行われてきた遺跡調査の歴史について概観することを目的とする。また、「イラク戦争」以降、主として欧米の調査団によって始まった遺跡調査についても触れながら、当地域における考古学研究の現状と問題群を把握し、当地域がもつ考古学的な可能性について提起してみたい。

## I. クルディスタンと自然環境

広義に言う「クルディスタン」とは、基本的にはクルド語を母語とし一定の文化的共通性をもったクルド系諸民族の居住する地域を指す<sup>(註3)</sup>。おおよそトルコ、シリア、イラン、イラクの現代国家群にまたがる地域にクルド系民族は居住するが（山口 2013a）、その一部の集団はアルメニアやアゼルバイジャンにもコミュニティを成しているという（McDowall 2004）。しかしクルド系社会は、しばしば「国家をもたない最大の民族」と称されるように、近現代における国民国家形成の歴史のなかで多大な変容を蒙った結果、政治経済や文化、言語、宗教、民族的アイデンティティの点で、それぞれの居住する国家や地域によって大きな差異、あるいは歪みを見せている（山口 2013b, McDowall 2004など）。国内外のメディア等では一般に「クルド人」と一括して総称されることが多いが、そうした一枚岩的な理解では説明できない多様な要因が広義のクルディスタンという世界を形成していると言えよう。近代国家としてのイラク共和国の成立とその後の歴史も（Yildiz 2007）、以下に述べるように、クルディスタン地域の考古学の歩みと無関係ではない<sup>(註4)</sup>。

地形的にみれば、クルディスタンは周辺地域に比べて山岳地帯が大部分を占めている（図1）。特に本稿の対象であるイラク領クルディスタンは、アラビア・プレートが北の巨大なユーラシア・プレートに衝突して隆起、形成されたザグロス山脈の南麓に位置している（Fisher 1978）。現イラク・イラン国境を走る付近では、ピジューダール山脈やハウルマン山脈といった2000～3000メートル級の高山地帯が屏風のように屹立する。また、こうした山脈と平行するような形で、南前面には1000メートル程度の石灰岩山地（カラ・ダーグ山地、ピラ・マグルーン山地、バラドスト山地、アクラ・ダーグ山地など）が幾重にもつらなり、さらに南方に広がる平原部と画されているのも大きな特徴である。こうした東西に弧状に延びる山脈の間を縫うようにして水量の豊富な河川（大ザーブ川、小ザーブ川、タンジェロ川、ディヤラ川など）が流れ、大小様々な規模の溪谷や山間盆地が発達している。こうした河川は例外なくティグリス川の東岸に合流し、メソポタミ

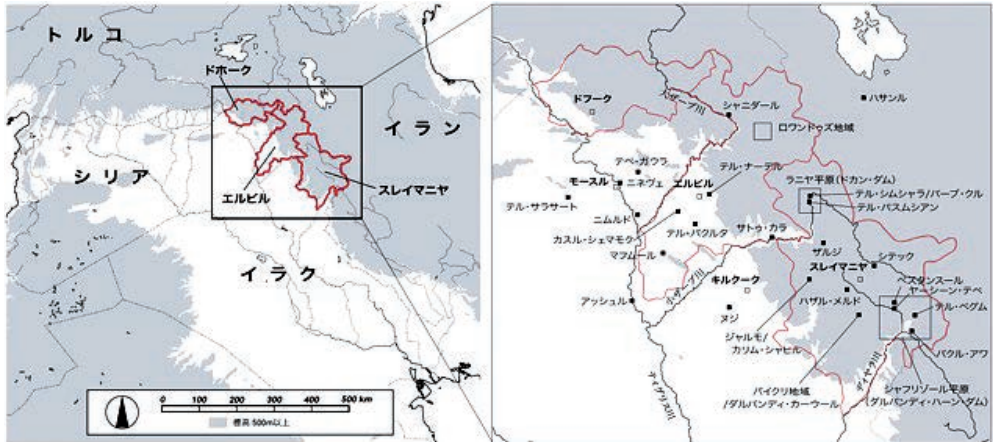


図1 イラク・クルディスタンの位置と本稿で言及する主要な遺跡（□は現代都市、■は遺跡を示す）

アを貫流した後、ペルシア（アラビア）湾に注ぐ。このような地形的特徴からみて、クルディスタンは決して孤立した地域ではなく、無数の河川や山間に点在する盆地を通じた交通が可能だったことが窺える。2000メートルを超える山脈地帯においても古来峠道や間道が発達し、イラン高原方面との交流があったことも知られる一方で、南メソポタミアやイラク北部のジャジーラ平原との交通も容易だったことは歴史時代以降の様々な文献にみえる。

気候分類としては地中海性気候に含まれ、夏季は高温で乾燥が著しい一方、冬季は寒冷が厳しく降水降雪が多い。当該地域の年間降水量は約600ミリを超え、一部の地域では1000ミリ以上を記録する場合もある。そのため、植生も比較的豊富で、山地ではカシヤナラ、マツ、スギの他、ピスタチオやアーモンドの疎林帯が卓越する（大津・常木・西秋 1997）。ムギ類や果実をはじめとする野生植物や木材資源のほか、ヤギ、ヒツジなどの野生動物や、金属などの天然資源も分布している。以上のような地勢的要因を考えると、過去においても、人類と自然との関わり、あるいは人類の基本的な生業システムの点で、すぐ南に接するステップ地帯であるイラク北部ジャジーラ平原や平坦な沖積平野からなるイラク南部とは異なっていたことは想像に難くない。

## Ⅱ. イラク戦争以前の考古学調査（19世紀半ば～1970年代）

イラク領クルディスタンの地に眠る古代文化が注目されるようになったのは意外に早く19世紀中頃に遡る。1844年、J・F・ジョーンズが数遺跡について記載を残しているのが初見であろう（Jones 1857）。ほぼ同時期の1840年代、ニネヴェのクユンジク丘やニムルド遺跡といった新アッシリア帝国の都城遺跡の発掘調査によって一躍有名になったA・H・レヤードもエルビル市近郊の遺跡について踏査を行い、若干の記述を残している（Layard 1853）。その後、1926年にはアメリカのE・スパイザーが調査旅行を行い、米国東洋研究協会誌にその詳細を掲載した（Speiser 1926/27）。スパイザーはそれまで未踏の地だったスレイマニヤからシャフリゾール地域にかけて遺跡踏査に取り組み、ヤーシーン・テペやバクル・アワ遺跡の試掘も行ったほか（後述）、自ら

踏査した遺跡の位置関係を基にしてアッシリア王アッシュルナツイルパル2世のマザムア遠征に関連した地名考証を行っている。

現在のエルビル市以南地域は旧来アッシリア帝国の故地に隣接することから、帝国の支配領域拡大との関連で古代遺跡の調査も注目を浴びた。イタリアのG・フルラーニらはすでに1930年、カスル・シェマモク遺跡 (Qasr Shemamok) を含む同地域の複数の遺跡において短期間の試掘調査を行っている (Furlani 1934)。第二次世界大戦後の1948年にはM・エル＝アミンとM・E・L・マロワンによって、フルラーニと同じアッシリア平原南部のマフムール地域で試掘調査が行われた (El-Amin & Mallowan 1949, 1950)。カウラ・カンダル (Kaula Kandal) やテル・イブラヒム・バーイス (Tell Ibrahim Bayis) からは銘文の刻まれた焼成煉瓦片が出土し、前者からは新アッシリア期 (前9～7世紀) の大型建築遺構、そして後者では弓兵を描いたフレスコ画を伴う同時期の「神殿」遺構が発掘されている。さらにテル・アクラハ (Tell Akrah) の試掘調査では前2千年紀後半の中アッシリア期の居住層に加え、ハブール式彩文土器の存在から前2千年紀前半に遡る層位も確認された (El-Amin & Mallowan 1950)。

第二次世界大戦前後までの発掘の多くはいずれもクルディスタン考古学研究、ひいてはメソポタミア全域の考古学にそれほど大きな寄与をもたらしたとは言いがたい。その原因としては、限られた調査期間や小規模なトレンチ発掘に依るところも大きいですが、まだ当時の考古学調査の大部分が大規模な都市集落遺跡の調査や、粘土板文書を中心とする文献史料の獲得を重視していた点、また継続的な発掘調査に発展しなかったこともあると考えられる。そうした中で最も成功を収めた大規模な発掘調査として、1920年代後半から30年代初頭にかけて実施されたテペ・ガウラ遺跡 (Tepe Gawra) やキルクーク近郊のヌジ遺跡 (Nuzi) の調査は見逃すことができない。いずれの遺跡も所謂クルディスタンには含まれないものの、ハラフ期からウバイド期、後期銅石器時代、そして前期青銅器時代にかけての拠点集落テペ・ガウラ (Speiser 1935; Tobler 1950)、そして前期から後期青銅器時代にかけての都市遺跡でフリ人に関わる粘土板史料を数多く出土したヌジ (古代ガスルGasur) (Starr 1939) は、クルディスタン地域をも包括する地域的な物質文化編年を提供してくれた点で今後一つの参照軸となることは確実である。また1940年代のイラク考古局による全国遺跡分布地図の作成によって、クルディスタン地域に所在する遺跡も数多く踏査・登録され、その後の遺跡調査にも大きな影響を与えた (Directorate General of Antiquities 1979)。

そして20世紀中頃、イラク・クルディスタンは突如として西アジア考古学のなかで脚光を浴び始めた。第一にまず、R・S・ソレッキによる旧石器時代洞窟遺跡の調査 (Solecki 1963) が挙げられる。1950年代初頭から大ザーブ川上流域のロワンドゥズ地域やバラドスト山脈地域において洞窟踏査を行っていたソレッキは、その後着手したシャニダール洞窟 (Shanidar) の発掘およびネアンデルタール人骨の発見によって当時の学界にセンセーションを巻き起こした (Solecki 1952a, 1952b, 1953)。6万年前から4.5万年前とされるD層の4号人骨の周囲からは植物の花粉が大量に伴出したことから、当時のネアンデルタール人が当時死者に献花した動かぬ証拠であると論じられてきた (Solecki 1971)。しかし、そうした花粉は、花を集めて巣穴に持ち帰るとい

習性をもったアレチネズミの一種による攪乱孔に伴っていた可能性が濃厚で、当時の人類の埋葬行動を表すものではないことが近年指摘されている (Sommer 1999)。また「原新石器時代」(Proto-Neolithic)にあたるB1層では26基の墓葬を確認し、放射性炭素年代測定によってレヴァント地域のナトゥーフ後期、およそ10,600 BPに年代づけられている (Solecki et al. 2004)。この時期の墓葬としてメソポタミアでは他に類例もなく、墓の共伴遺物として多数のビーズや線刻石製品が副葬されていたことも当時の社会を復元する上で興味深い。

第二に、もっともよく知られている調査に、R・J・ブレイドウッドらによる農耕牧畜の起源、新石器化をめぐる調査と研究がある (Braidwood & Howe 1960; Braidwood et al. 1983)。通称「ジャルモ・プロジェクト」とも呼ばれるシカゴ大学調査団の一連の研究は、その後の西アジア新石器時代研究の大きな画期となった。無土器新石器時代から土器初現期に及ぶジャルモ遺跡 (Jarmo) のほか、カリム・シャヒル (Karim Shahir)、ギルド・アリー・アガ (Gird Ali Agha) などといった初期農耕に関わる先史遺跡を多数調査している。ブレイドウッドの提唱した農耕牧畜起源の「核地帯仮説」については既に邦文による詳しい概説が多くあるため本稿では割愛するが (藤井 2001など)、重要なのは、栽培植物 (コムギ、オオムギ) や家畜 (ヤギ、ヒツジ) の起源となった野生種がクルディスタンを中心とする丘陵や山麓地帯に生息していることから、農耕牧畜という生業システムが成立したのもこの地域であると推定して仮説検証的に解明に取り組んだ点である。北シリアや南東トルコでの発掘調査成果からみて、現在ではユーフラテス川中流域からティグリス川上流域にかけての山麓地帯を西アジア型農耕牧畜の起源地とみる考え (Cauvin 1994ほか) や複数地域における多元的な農耕起源論 (Fuller et al. 2011ほか) が有力になってきたとはいえ、東方のイラン高原やメソポタミア平原への農耕牧畜社会の拡散を考える上でクルディスタン地域がいつ、どのようにして新石器化を果たしたのか、新石器化に先立つ定住化過程と併せて今後ますます注目される場所である (註5)。

第三は、1957～1960年代初頭にかけてダム建設に伴う水没遺跡の緊急発掘調査が始まったことである。ディヤラ川上流のダルバンディ・ハーン・ダム (シャフリゾール平原の一部)、小ザーブ川上流のドカン・ダム (ラニヤ平原) の建設に伴って調査されたのがそれで、ナイル川上流のアスワン・ハイ・ダムと並んでダム開発調査及び集中的な救済プロジェクトの嚆矢とも言える。これらの地区においては主としてイラク人研究者による発掘調査が多く、後者のドカン・ダム水没区内に位置するテル・シムシャラ遺跡 (Tell Shimshara) におけるデンマーク隊が唯一の例外であった。これらの調査では歴史的にみて重要度の高い遺跡の調査・記録が目的とされていたため (Al-Asil 1956; Directorate General of Antiquities 1960)、遺物の表面採集のほか手つかずのまま水没した小型遺跡も数多い。

テル・シムシャラ遺跡はデンマーク隊とイラク隊によって1957年から1959年にかけて発掘調査が行われ、イスラーム期に相当する1-3層、「フリ時代」と呼ばれる前2千年紀前半の4-8層、そして9-16層の土器新石器時代が確認された (Ingholt 1957)。中層の4-8層では、クワリという人物が治める独立王朝時代と古アッシリア王国による征服以後の粘土板文書群 (計246点)

が宮殿とみられる大型建造物内から出土している。クワリを中心とする書簡文書のほか行政文書の解読研究から、前2千年紀前半のシュシャッラ市 (Šušarra) であったこと、当時のトゥルク人やアッシリア王国、マリ王国など周辺諸国との関係が窺われる (Læssøe 1957, 1959a, 1960; Eidem 1985)。また、新石器時代層では最古の無土器層 (16-13層) から粗製土器や彩文土器の出現する13-9層への層位変遷が捉えられ、ジャルモヤイラン側ザグロス山麓のテベ・グーランやサラブ遺跡と比較し、ザグロス系初期農耕文化 (*The Zagros group*) として位置付けられている (Mortensen 1962, 1964, 1970)。

テル・シムシャラと関連して、ラニヤ平原ではテル・バスマシアン (Tell Basmusian)、テル・カマリアン (Tell Kamarian)、テル・カラシナ (Tell Qarashina)、テル・エツ＝デーム (Tell ed-Dem) といった遺跡の発掘調査がイラク隊によって実施された (Al-Soof 1964)。ラニヤ平原で最大規模のテル・バスマシアンではIV層とV層から前2千年紀前半の日干煉瓦による神殿遺構が出土した (Al-Soof 1970)。同時期のテル・アル＝リマーやテル・レイラーンの建築と比較しうる半円柱の壁面装飾や、奉獻台などの施設を備えた矩形建築で、山羊装飾付の望楼形特殊土器5点が出土している。III層を中心に6点の粘土板文書片も出土したが、書体などから判断して中アッシリア時代の書簡であるという (Læssøe 1959b)。さらに下層では前3千年紀や銅石器～新石器時代の層位も確認されている。そのほかのラニヤ地区の遺跡調査に関して、いずれもごく一部の成果しか公表されていないが、後期銅石器時代に当たるウルク期の土器資料についてはB・A・アル＝スーフによる集成がある (Al-Soof 1964)。

スレイマニヤ県の北東に位置するシャフリゾール平原でもダム建設に伴って遺跡分布調査が実施され、数カ所の遺跡において小規模な試掘調査が行われている。特に、バクル・アワ (Bakr-Awa) とヤーシーン・テベ (Yasin Tepe) の両遺跡では層位の堆積状況を確認する調査が行われた。いずれも主要なテル部分が300メートル四方で高さ25メートルを超え、低いテル部分を含めると30ヘクタールを超える巨大遺跡である。バクル・アワでは城下区のトレンチで、イスラーム期及び鉄器時代層の下から古バビロニア時代の層位 (4-8層) が確認された (Al-Husaini 1962; Madhloom 1965)。このうち8層では調査者が「神殿」とみなす大型建造物を確認し、暦注を記した粘土板文書片が出土している (Al-Husaini 1962; Matoush 1961)。一方、ヤーシーン・テベではテル頂上部の発掘区で住居遺構に伴って、69枚の金貨埋納と耳飾2点の入った筒形銅器が見つかった (Hijara 1975)。金貨の年代から10～12世紀頃の居住があったことが推定されている。したがって、こうした大規模遺跡では下層に鉄器時代から青銅器時代、さらに先史時代に遡る長い居住層があって、上層に中世イスラームからオスマン朝にかけての分厚い層位堆積が重なっていると考えられる。そのため、下層部分の広範な発掘調査は容易ではない。

このほかシャフリゾール平原では、テル・ベグム遺跡 (Tell Begum) で1960年に20枚に及ぶ層位堆積を確認し、少なくともV層からにXX層までハラフ期彩文土器を出土した。したがって、後期新石器時代から銅石器時代にかけての有望遺跡であると報告されている (Hijara 1997: 127-129)。また、前2千年紀前半の層位を確認し特異な磨研土器で知られるテル・シャムル (Tell

Shamlu) (Al-Janabi 1961)、アッバース朝期とウバイド後期～ウルク期の層位がみられるテル・アルバト (Tell 'Arbat) (Hijara 1975)、同じくウバイド～ウルク期のテル・クルド・レシュ (Tell Kurd Resh) といった多数の遺跡で試掘調査が実施されている (Hijara 1976, 1985/86)。さらに、1970年にスレイマニヤ県下において岩刻画や碑文の踏査を行ったイラク隊が、オスマン朝期の城砦址を確認したほか、ダルバンディ・カーウール (Darband-i Kāūr) にてアッカド王ナラム・シンを表現したとみられる磨崖浮彫や、カズカバン (Qazqaban) でアケメネス朝期のものと思われる岩窟墓を発見していることは注目されよう (Yasin & Madhloom 1970)。

エルビル県内では、エルビル市内に位置するテル・カリンジ・アガ遺跡 (Tell Qalinj Agha) の発掘調査が1966年から1970年にかけて実施された (Al-Soof 1966, 1967, 1969; Hijara 1970, 1973)。銅石器時代のウバイド期から後期銅石器時代のウルク期にかけての遺跡で、テベ・ガウラやテル・サラサート (Tell Thalathat) といった北イラク特有の銅石器文化との類縁性が窺われる (Dunham 1999; 江上編 1958)。

1970年代以降、サッダーム・フセイン政権の下でクルド勢力と政権側との抗争が激しさを増した結果、クルディスタンでは考古学的な発掘調査のみならず外国人の立ち入りすら困難になっていった。そして1980年代のイラン＝イラク戦争を経て、1990年の湾岸戦争を境としてイラク全土での考古学調査も停滞を余儀なくされた。

以上、1970年代までのクルディスタン考古学をまとめると、それまで未知であったザグロス山麓地域の先史・歴史時代遺跡の発掘が活発に行われ、基本的な資料が蓄積されていったのがこの時期である。特に、中部旧石器時代から新石器時代にかけての基本的な編年層序が把握されるとともに、農耕牧畜の起源をめぐるその後の研究を牽引するモデルを提示したことは大きな貢献であったと言えよう。しかしながら、考古学上の課題も数多く残されている。まず前期青銅器時代から後期青銅器時代、そして鉄器時代にかけて一貫した土器編年を確立できるような遺跡が欠如している。中期青銅器時代 (前2千年紀前半) については多くの遺跡で粘土板文書を含む良好な資料が得られているものの、土器型式などの継時的変化を把握する編年構築をはじめとして、基礎研究は依然としてなされていない。また、これら物質文化の相対編年とともに、先史時代を含めた信頼できる放射性炭素年代測定データも僅かである。こうした事情を勘案すると、近年シリアやアナトリア地域を中心に議論されている各時代の様々な問題群にアプローチできるデータがまだ欠落していると言ってよいだろう。

### Ⅲ. イラク戦争以後の考古学調査 (2003年以降) : 現状と課題、可能性

2003年のイラク戦争後、主要な武力戦闘はほぼ終了したとはいえ、政治的混乱や宗教派閥間の権力闘争などに起因するテロ攻撃が現在に至るまでイラク各地で相次いでいる。しかし、イラク国内でもすでに自治権を獲得していたクルディスタン地域内では顕著な戦乱はみられなかったようで、戦争後10年を経て治安状況もイラク国内の他地域に比べかなり安定してきた。こうしたな



かで2006年以降、本格的な遺跡調査や文化財保護事業がにわかに活発化している。クルディスタン現地の考古局を主体とした調査に加えて、諸外国調査団による発掘調査・遺跡踏査・史跡保存活動も進行中である。2013年時点ですでに30に近い調査団がクルディスタン地域内で調査を開始しており、2014年5月現在、ようやく一部の調査団の概報が研究雑誌に公表され始めた段階である (Miglus et al. 2011; Ur et al. 2013; van Soldt et al. 2013など)。それ故、2000年代以降の調査を総括するには時期尚早かもしれないが、本稿では以下に概報等が公表されている調査を対象に概略を述べてみたい<sup>(註6)</sup>。こうした調査はそれぞれの調査団の目的や性格によって、以下に述べるいくつかのパターンに分かれると言えるだろう。

#### (1) 既知および新発見の遺跡の発掘、再発掘

最近の発掘調査事例のなかで最も多いのが、すでに知られている遺跡の発掘調査あるいは再発掘調査である。すでに述べたように過去の遺跡調査の内容や成果は必ずしも明らかでない場合が多く、この地域の遺跡調査を再開するに当たって、既知の遺跡の層位堆積を再度確認することが多くの調査団の当面の目的となっているようだ。その代表格は、シャフリゾール地域のバクル・アワ遺跡である (Miglus et al. 2011)。2010年以降ドイツ隊による発掘調査が実施され、イラク隊が検出した先述の大型「神殿」建造物の精査が行われている。また注目すべき発見として、古バビロニア期の日干煉瓦によるヴォールト墓が見つかっている (Miglus et al. 2011: 149-153)。さらに、同じシャフリゾール地域ではテル・ベグム (Tell Begum)、ヤーシーン・テペといった遺跡が近年再発掘の対象となった。このうち、ハラフ期をはじめとする新石器時代の堆積層が厚く存在するテル・ベグム遺跡では、オランダのO・ニウウェンハウゼによるオランダ調査団が以前の発掘区の再確認と清掃を2013年から開始している<sup>(註7)</sup>。また、エルビル県での発掘調査も盛んである。古代カズ (Kakzu) あるいはキリズ (Kilizu) に比定されるカスル・シェマモク (Qasr Shemamok) 遺跡ではフランス隊が2010年から、またテル・ナーデル (Tell Nader) 及びテル・バクルタ (Tell Baqrta) ではギリシアのアテネ大学調査隊が発掘を実施している (Kopanijs et al. 2012)。

調査の対象となっているのは、既知の遺跡の再発掘ばかりではない。英国レディング大学のR・マシューズを中心とする中央ザグロス考古学プロジェクト (The Central Zagros Archaeological Project: CZAP) は、ザグロス地域における新石器化の実態を探る目的で、イランとイラク両国にまたがる新石器時代遺跡の調査を継続している。その一環としてシャフリゾール平原のベストアンスール (Bestansur) 遺跡の試掘及びテル・シムシャラの再発掘が始まった。前者の調査では初期新石器時代に遡るとみられる層位を確認し、ダム湖の水位変動によって浸食が危惧される後者の遺跡では、初期新石器時代層に由来する動植物遺存体のサンプリングが行われている<sup>(註8)</sup>。また、J・エイデム及びT・B・B・スクルブルを代表とするコペンハーゲン大学は、シムシャラの再発掘および近隣の遺跡群バブ・クル (Bab-w Kur) における調査を開始した。ドカン・ダムの水際に位置するこの遺跡では、すでに城壁と思われる遺構に接して三列構成式の住居遺構

が検出され、後期銅石器時代2期に年代付けられている<sup>(註9)</sup>。また近傍の小型テルからは後期銅石器時代後半(ウルク期)の遺構を検出するとともに、数多くのBRB土器片が出土した(Skuldbøl, pers.comm.)。

ドカン市の南西、小ザーブ川右岸に位置するサトゥ・カラ遺跡(Satu Qala)では、2010年から2011年にかけて新たに発掘が行われた(van Soldt et al. 2013)。発掘区では前9世紀初頭のトゥクルティ・ニヌルタ2世の銘文をもつ彩釉煉瓦片やアッシュルナツィルパル2世銘の釘状彩釉製品のほか、典型的な新アッシリア期の土器資料が、宮殿の一部と考えられる遺構に伴って出土している。同遺跡は、アッシリア属州化以前には古代イドゥ国(Idu)の中心地であったことが明らかとなった。ハサナル遺跡IV層から出土した石製容器の銘文にBa'auriというイドゥ王がみえることは、ザグロス山脈を越えた交流があったことを如実に物語っている(van Soldt et al. 2013: 213; Salvini 1984)。

以上の諸外国調査団による活躍に加えて、現地クルディスタンの研究者による発掘調査も見逃せない。スレイマニヤ市北20キロに位置するシテック(Sitek)における緊急発掘では、新アッシリア期の土地売買文書の破片が出土した(Altaweel et al. 2012: 8-9)。

## (2) 衛星画像を駆使した遺跡探知、遺跡分布と集落パターンの研究

近年、西アジア考古学の分野においても、機密指定を解除された衛星画像を考古学研究に活用する試みが盛んである(Wilkinson 2003; Ur 2003, 2010; Casana & Cothren 2008ほか)。地下に眠る遺跡の位置を特定するだけでなく、遺跡周辺に古代の道路や運河などの人工遺構の痕跡を見いだしたり(Wilkinson et al. 2010など)、遺跡をめぐる過去の景観復元を試みたり、そうした遺跡の空間情報を地形データや古環境データとともに地理情報システム(GIS)によって統合・応用させて研究する手法が開発されてきている(Casana & Cothren 2008; 古澤・大西・近藤 2011)。クルディスタンにおいても、丘状遺跡を中心に実地訪問し散布遺物を採集する従来の考古学的踏査とならんで、早くもそうした研究手法が取り入れられている。なかでも注目すべきは、J・A・ウルらのハーヴァード大学隊による「エルビル平原考古学サーヴェイ(Erbil Plain Archaeological Survey: EPAS)」プロジェクトである(Ur et al. 2013)<sup>(註10)</sup>。エルビル市周辺地域において衛星画像から1200カ所以上の遺跡を同定するだけでなく、実地踏査で表採遺物のサンプリングを行い、古代の運河やカレズといった集落外の生活遺構についても注視している。スレイマニヤ県では、古環境復元を視野に入れつつ緻密なサーヴェイ調査を行っている調査団として、ドイツ・ハイデルベルク大学のS・ミュールらによるシャフリゾール考古学踏査計画(Shahrizor Survey Project: SSP)が実施されている(Altaweel et al. 2012)。このほか、アメリカ合衆国ボストン大学隊(代表: M・D・ダンティ)によるロワンドゥズ盆地の遺跡分布調査<sup>(註11)</sup>、ローマ大学隊のパイクリ地域分布調査(代表: C・G・チェレティ)<sup>(註12)</sup>、ポーランドのアダム・ミツキウィツ大学隊(代表: R・コリンスキー)による大ザーブ川上流域の考古学プロジェクト(UGZAR Project)<sup>(註13)</sup>、イタリア・ウディーネ大学隊(研究代表: D・モランディ

=ボナコッシ)のニネヴェ地域プロジェクト(The Land of Nineveh Regional Project)など、すでにクルディスタン地域の主要な平野部・山間盆地はいずれかの調査団による分布調査の範囲に含まれている状況である。これらの調査はいずれも遺跡分布の現状を把握することを当面の目的に掲げて、2006年にいち早く始まったバイクリ調査を除けば2012年以降現地調査が始まったばかりである。そのため、まとまった正式報告が公表されている調査は現段階では少ないものの、それぞれの調査において予備的ながら、数十から数百地点に達する遺跡や遺構を確認しているようだ(例えば、UGZARプロジェクトの遺跡データ参照)<sup>(註14)</sup>。しかし、網羅的に過去の遺跡分布を復元できるかどうかに関わる遺跡分布調査の精度は、対象とする地域の地形や環境によって、また調査の重点をどこに置くかによって(例えば、鉄器時代に相当する新アッシリア期の集落と大規模景観開発を主眼とするニネヴェ地域プロジェクトなど)、大きく左右されざるを得ない。これらのほとんどの遺跡分布調査が衛星画像を利用し、丘状遺跡(テル、テペ、ギルドなどと呼ばれる中近東特有の遺跡形態)の確認を優先しているようであるが、フィールド上で丘状を呈さない短期的逗留遺跡や旧石器時代をはじめとする遺物散布地、洞窟・岩陰遺跡、集落から離れた墓地遺跡、そして植生条件等によって視認性が保証されない遺跡の検出には、衛星画像データの解析だけでは困難が伴う。とりわけ丘状をなさない小規模遺跡や墓地遺跡の場合、遊牧民や移牧民の活動痕跡を示唆することも多い。従来のテル型遺跡中心の集落論の欠陥を補い、遊動民の生業戦略にアプローチできる可能性を秘めているという点で、そうした遺跡の確認は過去の遊牧移牧民社会の復元にも寄与するであろう(Cribb 1991; Barnard & Wendrich 2008)。そうした意味で、衛星画像データに依拠するだけでなく、完新世以降の地形改変が少なく古代の地表面をかなりの程度残している地域を地道に歩行踏査する必要もある。さらに遺跡分布に関わる重要な側面として指摘されているのは、盆地内の平野部に堆積した沖積土壌によって低い小型の集落遺跡が隠蔽されてしまっている事例である。シャフリゾール平原では、前6千年紀以前の先石器新石器時代や後期新石器時代の遺跡が極めて少ないが、そうした遺跡の多くが数メートルに及ぶ土壌堆積に埋もれている可能性が深掘り試掘調査によって示唆されている(Altaweel et al. 2012: 6-8)。したがって、ある一定の領域の遺跡分布を知り、過去の集落居住パターンを復元しようとする場合、ただ単に丘状遺跡を探るだけでなく、対象とする地域の地形や遺跡形成過程を把握し、古環境の変遷も理解しつつ、様々な専門分野の知見を基に学際的に研究する必要があるだろう。

### (3) 遺跡破壊や保存修復に伴う緊急調査

上記3つの遺跡調査や研究と異なり、現時点では調査事例はまだ少ないものの、今後ますます現地の考古学において重要性を増すと思われるのが、失われつつある古代遺跡や史跡の保全・記録を目的とした緊急調査である。その背景にあるのは、特にイラク戦争後長足の経済発展を遂げるクルディスタン地域での土地開発がある。あたかも高度経済成長期の戦後日本におけるように、道路や運河、石油開発に伴うパイプライン敷設、宅地・産業用地の区画整備など、全土において多様なインフラ開発整備計画が空前の規模で進行しつつある。それに伴って数多くの既知・未知

の遺跡が破壊の憂き目にあう可能性は非常に大きい<sup>(註15)</sup>。特に、石油関連の開発には世界的な化石燃料、エネルギー需要と相俟ってめざましい発展がみられる。さらに1950年代と同様、安定した農業用水の確保と電力需要をみたすために、大規模な水力発電ダムの建設計画も始まる可能性が高い。

最後に、ユネスコなどの史跡整備や保存修復と関連して、エルビル城址の調査について触れておきたい。エルビル市の中心にそびえるエルビル城は、シリアのアレッポ城などと同様、それ自体が約10haの規模を有するテル型遺跡であり、調査も殆ど手つかずであった。チェコとイラクの合同調査団は遺跡の存続年代を評価するために、西側斜面で遺物の表面採集を集中的に行い、中部旧石器時代の剥片石器や新石器時代～イスラーム後期の様々な時代の土器資料を報告して(Nováček 2008)、今後の動向が期待される。

## まとめにかえて：今後の課題

イラク・クルディスタンにはこれまで未調査の地域・遺跡が豊富に存在することは疑う余地もない。しかし、これからクルディスタン地域の考古学を論じるためには、イラクの他の地域のみならず、研究蓄積のあるシリア・アナトリア地域、イラン側のザグロス地域も見据えた幅広い研究視座をもち、計画的な調査と迅速な研究と調査報告が求められるだろう。当地域が西アジアの考古学に貢献できる問題は、例えば、旧石器時代の生活復元、現生人類の拡散、新石器時代における農耕牧畜の起源と拡散、遊牧（移牧）社会の成立と展開、複雑社会・都市・国家の形成と長距離交易、アッカドやアッシリア帝国、アケメネス朝など周辺帝国による政治経済支配の実態解明、そうした広域帝国と在地の政治組織との関係、文献史料と考古学の連携研究など、数多く残されている。

以上に述べてきたように、近年活発になってきた考古学調査は開始してまだ多くの時日を経っていないこともあり、考古学的にそれぞれのデータを評価できるようになるには、さらなる研究成果の公表を待たねばならないだろう。そうした中で、治安維持は言うまでもなく、継続して考古遺跡の発掘調査や史跡整備を行い、調査研究できる体制づくりが急務であると考えられる。発掘遺跡や増加しつつある出土資料をどのように保管、管理、保存し、文化財として活用していくか、また有事の際、イラク戦争でみたような文化財の破壊をいかに食い止め、被害を最小限にとどめるか、現地住民への教育普及も見据えた長期的な展望と今後の努力にかかっているとと言えるだろう<sup>(註16)</sup>。

## 註

(註1) 現在の行政区分としては、ドフーク、エルビル、スレイマニヤの3県から構成されるイラク共和国内の自治区である。

(註2) 2013年11月4日から6日まで約3日間、イラク共和国クルディスタン自治区のスレイマニヤ県及びエルビル県を訪問した。この訪問は現地考古学の現状を視察するとともに、今後の発掘調査の可能性を探るという目的であった。お誘いいただいた国士舘大学の沼本宏俊教授、筑波大学の山田重郎教授、柴田大輔准教授、そして現地研究者との調整に尽力して下さった中央大学の渡井葉子講師に感謝申し上げます。また、現地で我々を温かく歓迎して下さいましたKawah Shawaly氏(パリ大学)、Kamal Rasheed氏(スレイマニヤ県文化財局長)、Hashim H. Abdulla氏(スレイマニヤ博物館館長)、Zidane R. Bradosty(サラーハッディーン大学考古学科長)の諸氏にも謝意を表したい。なお、渡航費用は科学研究費基盤研究(B)「古代メソポタミア北西部における歴史考古学的研究」(代表:沼本宏俊)による。

(註3) OED (Oxford English Dictionary) Onlineによれば「Kurd」、「Kurdistan」は下記の様に解説されている:A member of a pastoral and agricultural people of Aryan stock, found in northern Iran and Iraq, eastern Turkey, and regions of Azerbaijan and Armenia (the area being collectively known as Kurdistan).

また、「Encyclopaedia Britannica」はつぎの様に解説する:Kurdistan, Arabic *Kurdistān*, Persian *Kordestān*, broadly defined geographic region traditionally inhabited mainly by Kurds. It consists of an extensive plateau and mountain area, spread over large parts of what are now eastern Turkey, northern Iraq, and western Iran and smaller parts of northern Syria and Armenia. Two of these countries officially recognize internal entities by this name: Iran's northwestern province of *Kordestān* and Iraq's Kurdish autonomous region. The Kurdistan ("Land of the Kurds") designation refers to an area of Kurdish settlement that roughly includes the mountain systems of the Zagros and the eastern extension of the Taurus. Since ancient times the area has been the home of the Kurds, a people whose ethnic origins are uncertain. For 600 years after the Arab conquest and their conversion to Islam, the Kurds played a recognizable and considerable part in the troubled history of western Asia—but as tribes, individuals, or turbulent groups rather than as a people.

(註4) 先史時代以降の過去の地域社会の展開と、近現代に成立した国民国家やエスニシティ、それらの枠組みとの間に直接的な因果関係がないことは言うまでもないが、地域における考古学研究の発達史と現在我々が扱うデータの偏りにはこうした歴史が暗に影を落としている。

(註5) その後、終末期旧石器時代末のザウィ・チェミ・シャニダール遺跡(Zawi Chemi Shanidar)から、カリム・シャヒル、テル・ムレファート(Tell M'lefaat)などのムレファート文化の諸遺跡を経て、ジャールモに至るクルディスタン初期完新世の編年が確立されてきたが、定住化、新石器化の過程や生業変化についてはなお不明な点も多い(Solecki 1981; 藤井 2001)。

(註6) こうした調査団の動向は専門雑誌などで陸続と公表されており、今後ますます新情報が増えるものと思われる。クルディスタン自治区内における発掘調査は年々増加の一途をたどっており、来年度にはさらに新規の調査が実施されていることは疑いの余地がない。本稿では2014年5月時点で筆

者らが利用できた情報に限って紹介した。

(註7) テル・ベグム遺跡の2013年調査には早稲田大学(当時)の小高敬寛氏も主要メンバーとして参加している(小高他 2014)。

(註8) 公式ウェブページ <http://www.czap.org>

(註9) 概報については、<http://www.sulyantiquities.org/art.php?english-2013-06-18-111239.html>を参照。

(註10) 紹介ウェブページ <http://scholar.harvard.edu/jasonur/pages/erbil>

(註11) 公式ウェブページ [http://www.jezireh.org/balabra\\_home.html](http://www.jezireh.org/balabra_home.html)

(註12) 公式ウェブページ [http://paikuli.bradypus.net/eng/index\\_eng.php](http://paikuli.bradypus.net/eng/index_eng.php)

(註13) 公式ウェブページ <http://archeo.amu.edu.pl/ugzar/indexen.htm>

(註14) UGZARプロジェクトに関して、以下のページで予備的な遺跡分布調査の結果が閲覧できる。

[http://archeo.amu.edu.pl/ugzar/catalogue\\_of\\_sites.htm](http://archeo.amu.edu.pl/ugzar/catalogue_of_sites.htm)

(註15) 2014年5月23日、クルディスタンから陸路で南東トルコを經由し、地中海へ輸送する新規パイプラインが稼働し、欧米向け石油輸出がすでに開始されている(<http://www.bbc.com/news/world-middle-east-27545439>ほか)。ただし、イラク本国政府を介さない石油輸出およびそこから得られる莫大な石油収入を、「不正な取引」とみなす本国政府と自治政府側との間に摩擦を引き起こしており、将来、両者間で深刻な政治問題となる可能性は否定できない(例えば、アル＝クドゥス紙の記事を参照。<http://www.alquds.co.uk/?p=172336>)。ちなみに、管見の限り、このパイプラインに伴う事前遺跡調査は行われていないようだ。

(註16) 研究者間の交流や連携をはかる試みとして、この数年の間に考古学・歴史学・文化財保存科学に関わる国際学術シンポジウムが定期的に開催されている。渡辺千香子氏が紹介したイラク考古学会議のほか(渡辺 2012)、2013年11月にはギリシアのアテネ市において「イラク・クルディスタン地域及び周辺地域における考古学調査(Archaeological Research in the Kurdistan Region of Iraq and the adjacent areas)」と題する国際学術会議、また2014年4月にはエルビル市で「古代アルベラ—イスラーム以前のエルビル史(Ancient Arbela: Pre-Islamic History of Erbil)」と題する研究大会が催されている。また、イラク考古遺産保存修復研究所(Iraqi Institute for the Conservation of Antiquities and Heritage)はエルビルに本部を置いて、遺跡保存、多様な文化財の保存修復、研修プログラムなどを行いながら、アメリカ合衆国やイタリアをはじめとする専門機関からの支援を得て、イラク人専門家の研修・人材育成にも意欲的に取り組んでいる。同研究所はウェブページ開設のほか(<http://iraqinstitute.com/en/>)、FacebookなどのSNSを利用した広報活動にも積極的に取り組み、情報を発信している(<https://www.facebook.com/Iraqinst>)。同様にインターネット上の情報発信は、スレイマニヤ県文化財局(<http://www.sulyantiquities.org/>)、スレイマニヤ博物館(<http://www.slemanimuseum.org/>)も行っており、海外の研究者もいち早く現地の調査速報や進行中の調査プロジェクトの内容に触れることができる。

**参考文献** (本稿を執筆する上で参照した文献の入手について、国土舘大学の沼本宏俊氏、筑波大学の柴田大輔氏、及び国土舘大学の堀岡晴美氏に大変お世話になりました。末筆ながら記して感謝します)

江上波夫編 1958 『テル・サラサート I : 第二号丘の発掘 (1956-1957年)』東京大学イラク・イラン遺跡調査団報告書 1、東洋文化研究所。

大津忠彦、常木晃、西秋良宏 1997 『西アジアの考古学』世界の考古学 5、同成社。

小口裕通 2008 「メソポタミア考古学の近年の歩み」『西アジア考古学』第 9 号、19-25頁。

小高敬寛、オリフィア・ニウウェンハウゼ、金田明美、カマル・ラシード 2014 「文明前夜のメソポタミア東縁部 —イラク・クルディスタン、テル・ベグム遺跡の発掘調査 (2013年)」『平成25年度考古学が語る古代オリエント：第21回西アジア発掘調査報告会報告集』日本西アジア考古学会、53-58頁。

藤井純夫 2001 『ムギとヒツジの考古学』世界の考古学16、同成社。

古澤拓郎・大西健夫・近藤康久 2011 『フィールドワーカーのためのGPS・GIS入門：フィールドにGPSを持っていこう GISで地図を作ろう』古今書院。

山口昭彦 2013a 「豊かなる辺境 —クルディスタンの地理概観」酒井啓子・吉岡明子・山尾大編『現代イラクを知るための60章』明石書店、258-262頁。

山口昭彦 2013b 「辺境の歴史 —クルディスタンの近現代」酒井啓子・吉岡明子・山尾大編『現代イラクを知るための60章』明石書店、263-267頁。

渡辺千香子 2012 「イラク考古学国際会議：新しい研究とプロジェクト」『オリエント』第55巻第 1 号、47-52頁。

Al-Asil, N. 1956 Recent Archaeological Activity in Iraq. *Sumer* 12 : 3-7.

Al-Husaini, M. B. A. 1962 The excavations at Tell Bakr Awa. *Sumer* 18 : 141-164. (in Arabic)

Al-Janabi, K. A. 1961 The excavations at Tell Shamlu in Shahrizor. *Sumer* 17 : 174-193. (in Arabic)

Al-Soof, B. A. 1964 Uruk Pottery from the Dokan and Shahrizor Districts. *Sumer* 20 : 37-44.

Al-Soof, B. A. 1966 Short Sounding at Tell Qalinj Agha (Erbil). *Sumer* 22 : 77-82.

Al-Soof, B. A. 1969 Excavations at Tell Qalinj Agha (Erbil), Summer, 1968. *Sumer* 25 : 3-42.

Al-Soof, B. A. 1970 Mounds in the Ranya Plain and excavations at Tall Basmusian (1956). *Sumer* 26 : 3-31.

Al-Soof, B. A., & Sh. Es-Siwani 1967 More Soundings at Tell Qalinj Agha (Erbil) . *Sumer* 23 : 69-75.

Barnard, H., & W. Wendrich (eds.) 2008 *The Archaeology of Mobility : Old World and New World Nomadism*. The Cotsen Institute of Archaeology Press.

Braidwood, R. J., & B. Howe 1960 *Prehistoric Investigations in Iraqi Kurdistan*. Studies in Ancient Oriental Civilization, No. 31. The University of Chicago Press.

Braidwood, L. S., R. J. Braidwood, B. Howe, C. A. Reed, & P. J. Watson 1983 *Prehistoric Archaeology along the Zagros Flanks*. Oriental Institute Publications, vol. 105. The University of Chicago Press.

- Casana, J., & J. Cothren 2008 Stereo analysis, DEM extraction and orthorectification of CORONA satellite imagery : archaeological applications from the Near East. *Antiquity* 82 : 732-749.
- Cauvin, J. 1994 *Naissance des divinités, naissance de l'agriculture : la révolution des symboles au Néolithique*. Paris : CNRS Éditions.
- Cribb, R. 1991 *Nomads in Archaeology*. Cambridge : Cambridge University Press.
- Directorate General of Antiquities 1960 Excavations of the Directorate General of Antiquities in Shahrizor. *Sumer* 16 : 147-149. (in Arabic)
- Directorate General of Antiquities 1961 Excavations of the Directorate General of Antiquities in Shahrizor. *Sumer* 17 : 221-222. (in Arabic)
- Directorate General of Antiquities 1979 *Atlas of the Archaeological Sites in Iraq*. Baghdad : al-Jumhuriyah Press.
- Dunham, S. 1983 Notes on the Relative Chronology of Early Northern Mesopotamia. *Journal of the Ancient Near Eastern Society* 15 : 13-38.
- Eidem, J. 1985 News from the Eastern Front : the Evidence from Tell Shemshāra. *Iraq* XLVII : 83-107.
- El-Amin, M. & Mallowan, M. E. L. 1949 Soundings in the Makhmur Plain, Part I. *Sumer* 5 : 145-153.
- El-Amin, M. & Mallowan, M. E. L. 1950 Soundings in the Makhmur Plain, Part II. *Sumer* 6 : 55-90.
- Fisher, W. B. 1978 *The Middle East*. Seventh edition. London : Methuen & Co. Ltd.
- Fuller, D. Q., G. Willcox, & R. G. Allaby 2011 Cultivation and domestication had multiple origins: arguments against the core area hypothesis for the origins of agriculture in the Near East. *World Archaeology* 43 : 628-652.
- Furlani, G. 1934 Gli scavi italiani in Assiria (Campagna del 1933). *Giornale della Società Asiatica Italiana* 2 : 265-276.
- Hijarah, I. 1970 Clay figurines from Qalinj Agha. *Sumer* 26 : 31-39. (in Arabic)
- Hijarah, I. 1973 Excavations at Qalinj Agha (Erbil), the fourth season 1970. *Sumer* 29 : 13-34. (in Arabic)
- Hijarah, I. 1975 Excavations in the Shahrizor:Yasin Tepe (the first campaign). *Sumer* 31:275-282. (in Arabic)
- Hijarah, I. 1976 Excavations in the Shahrizor : Tell Kurd Resh (the first campaign in 1971). *Sumer* 32 : 59-80. (in Arabic)
- Hijarah, I. 1985/86 Some comments on the socio-economic changes in the Uruk period in light of the excavations at Kurd Resh, Shahrizor plain. *Sumer* 44 : 7-9. (in Arabic)
- Hijara, I. 1997 *The Halaf Peridod in Northern Mesopotamia*. Edubba 6. London : Nabu Publications.
- Ingholt, H. 1957 The Danish Dokan Expedition. *Sumer* 13 : 214-215.
- Jones, J. F. 1857 *Memoirs of Baghdad, Kurdistan and Turkish Arabia*. Bombay.



- Kopanias, K., et al. 2012 The Tell Nader and Tell Baqrta Project in the Kurdistan Region of Iraq : Preliminary Report of the 2011 Season. Submitted for *SUBARTU – Archaeological Journal of the Kurdistan Region of Iraq*.
- Læssøe, J. 1957 An Old-Babylonian Archive Discovered at Tell Shemshara. *Sumer* 13 : 216-218.
- Læssøe, J. 1959a The Bazmusian tablets. *Sumer* 15 : 15-18.
- Læssøe, J. 1959b *The Shemshara Tablets: A Preliminary Report*. Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab Historisk-Filosofiske Skrifter 4, 3. Copenhagen : Munksgaard.
- Læssøe, J. 1960 The Second Shemshara Archive. *Sumer* 16 : 12-19.
- Layard, A. H. 1853 *Discoveries among the Ruins of Nineveh and Babylon with Travels in Armenia, Kurdistan, and the Desert : Being the Result of a Second Expedition Undertaken for the Trustees of the British Museum*. New York : G. P. Putnam & Co.
- Madhloom, T. 1965 The excavations at Tell Bakr Awa. *Sumer* 21 : 75-88. (Arabic)
- Madhloom, T., & W. Yasin 1970 Archaeological Explorations in Sulaimaniya Area. *Sumer* 26 : 347-360. (in Arabic)
- Matoush, L. 1961 L'almanach de Bakr-Awa. *Sumer* 17 : 17-66.
- Mortensen, P. 1962 On the Chronology of Early Village-Farming Communities in Northern Iraq. *Sumer* 18 : 73-80.
- Mortensen, P. 1964 Additional Remarks on the Chronology of Early Village-farming Communities in the Zagros Area. *Sumer* 20 : 28-36.
- Mortensen, P. 1970 *Tell Shimshara : the Hassuna Period*. Det Kongelige Danske Videnskabernes Selskab Historisk-Filosofiske Skrifter 5, 2. Copenhagen : Munksgaard.
- McDowall, D. 2004 *A Modern History of the Kurds*. Third revised edition. London : I. B. Tauris & Co Ltd.
- Nováček, K. 2008 Research of the Arbil Citadel, Iraqi Kurdistan, First Season. *Památky Archeologické* XCIX : 259-302.
- Salvini, M. 1984 Sui documenti scritti di Hasanlu. In P. E. Pecorella & M. Salvini (eds.), *Tra lo Zagros e l'Urmia : Ricerche storiche ed archeologiche nell'Azerbaigian Iraniano*, pp : 55-56. Roma : Edizioni Dell'Ateneo.
- Solecki, R. S. 1952a Notes on a Brief Archaeological Reconnaissance of Cave Sites in the Rowanduz District, Iraq. *Sumer* 8 : 37-47.
- Solecki, R. S. 1952b A Paleolithic Site in the Zagros Mountains of Northern Iraq, Report on a Sounding at Shanidar Cave. Part I. *Sumer* 8 : 127-191.
- Solecki, R. S. 1953 A Paleolithic Site in the Zagros Mountains of Northern Iraq, Report on a Sounding at Shanidar Cave. Part II. *Sumer* 9 : 60-93.
- Solecki, R. S. 1963 Prehistory in Shanidar Valley, Northern Iraq. *Science* 139 : 179-193.

- Solecki, R. S. 1971 *The First Flower People*. New York : A. Knopf.
- Solecki, R. L. 1981 *An early village site at Zawi Chemi Shanidar*. Malibu : Undena Publications.
- Solecki, R. S., R. L. Solecki, & A. P. Agelarakis 2004 *The Proto-Neolithic Cemetery in Shanidar Cave*. Texas A&M University Press.
- Sommer, D. J. 1999 The Shanidar IV Flower burial : a Re-evaluation of Neanderthal Burial Ritual. *Cambridge Archaeological Journal* 9/1 : 127-129.
- Speiser, E. A. 1926/1927 Southern Kurdistan in the Annals of Ashurnasirpal and Today. *The Annual of the American Schools of Oriental Research* 8 : 1-41.
- Speiser, E. A. 1935 *Excavations at Tepe Gawra : Volume I, Levels I-VIII*. Philadelphia : the University of Pennsylvania Press.
- Starr, R. F. S. 1939 *Nuzi : Report on the Excavations at Yorgan Tepe near Kirkuk, Iraq, 1927-1931*. Cambridge : Harvard University Press.
- Tobler, A. J. 1950 *Excavations at Tepe Gawra : Volume II, Levels IX-XX*. Philadelphia : the University of Pennsylvania Press.
- Ur, J. A. 2003 CORONA Satellite Photography and Ancient Road Networks : A Northern Mesopotamian Case Study. *Antiquity* 77 : 102-115.
- Ur, J. A. 2010 *Tell Hamoukar, Vol. I. Urbanism and Cultural Landscapes in Northeastern Syria : The Tell Hamoukar Survey, 1999-2001*. Oriental Institute Publications, vol. 137. The Oriental Institute of the University of Chicago.
- Ur, J. A., L. de Jong, J. Giraud, J. F. Osborne, & J. McGinnis 2013 Ancient Cities and Landscapes in the Kurdistan Region of Iraq : The Erbil Plain Archaeological Survey 2012 Season. *Iraq LXXV* : 89-117.
- van Soldt, W. H., C. Pappi, A. Wossink, C. W. Hess, & K. M. Ahmed 2013 Satu Qala : A Preliminary Report on the Seasons 2010-2011. *Anatolica XXXIX* : 197-239.
- Wilkinson, T. J. 2003 *Archaeological Landscapes of the Near East*. Tucson : University of Arizona Press.
- Wilkinson, T. J., Ch. French, J. A. Ur, & M. Semple 2010 The Geoarchaeology of Route Systems in Northern Syria. *Geoarchaeology* 25/6 : 745-771.
- Yildiz, K. 2007 *The Kurds in Iraq : The Past, Present and Future*. Revised edition. London : Pluto Press.



写真1 ドカン市北を流れる小ザーブ川溪谷（北から撮影）。



写真2 シャフリゾール平原の景観。ザラーイン西付近。遠景にうっすら見える山岳はハラブジャ東のイランとの国境をなすザグロス山系の支脈。



写真3 ヤーシーン・テベ遺跡（南から撮影）。遺跡手前の水溜まりは、近隣のベスタンスール遺跡付近の泉から流れ出た小川によるもの。



写真4 バクル・アワ遺跡（東から撮影）。円錐台形の形状がはっきりと分かる。



写真5 ラニヤ平原の景観（南から撮影）。



写真6 テル・シムシャラ遺跡からドカン・ダムを望む。遺跡手前はダム湖の浸食により大きく削平を受けている。遠方ダム湖に浮かぶ小島は、テル・バスマシアン遺跡（北から撮影）。

（おおつ ただひこ：アジア文化学科 教授）

（しもがま かずや：古代オリエン特博物館研究員、人間文化研究所 客員研究員）